

キイロサナエ *Asiagomphus pryeri* (Selys)

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は48%、
現存数は12.5であり、準絶滅危
惧に相当する。



♂. 瀬戸市海上町, 1999年6月11日, 高崎保郎 撮影

【形態】

黒地に黄斑のある大型のサナエトンボである。ヤマサナエに似ているが、♂は尾部の下付属器が上付属器より長いこと、また♀は生殖弁が下方に突出していることで識別できる。

和名は同属のヤマサナエよりも黄色の強いサナエトンボという特徴に由来する。

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張～三河の丘陵地から低山地を中心に24市町村(旧市町村単位)で記録されている。

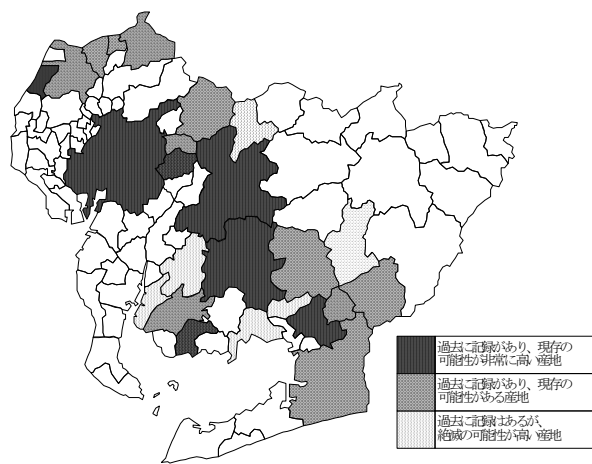
【国内の分布】

本州東北部から九州南部にかけて分布し、種子島でも記録されている。

【世界の分布】

日本特産種である。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

成熟成虫は、流れの緩やかな河川中流域や、それに接続する用水路などで見られる。未熟成虫は、発生地付近の樹上で生活しているようで、見かけることは少ない。幼虫は、砂泥質の河床でもやや泥の多い部位に潜り込んでいることが多い。

成虫は5月頃から羽化し、成熟成虫は7月頃まで生殖行動を行なう。幼虫は通常足かけ3年で成虫になるようである。

【現在の生息状況／減少の要因】

尾張では東部丘陵地の小川などに現存する。木曾川でも記録されているが、犬山付近は近年調査されておらず、一宮市(旧尾西市)では確認例がある。西三河では矢作川水系に現存するが、規模の小さな河川で見られることが多い。東三河では豊川市周辺の丘陵地にある小河川や用水路で見られる。いずれの産地も河川の限られた範囲にのみ生息していることが多い。

本種は同属のヤマサナエに比べてやや泥の多い砂泥を好む。県下に多産するヤマササナエよりも環境へのこだわりがあると推測され、それが分布の狭さにつながっているようである。よって河川改修などにより、好みの環境がなくなると絶滅につながりやすい。

【保全上の留意点】

- 1) 成虫の産卵域となる岸辺の砂地の確保
- 2) 幼虫の生息域となる砂泥底の確保
- 3) 河川の水質汚濁の防止

(吉田雅澄)